

宋代皇帝御書の機能と社会

—孝宗「太白名山碑」(東福寺蔵)をめぐって

《キーワード》三館秘閣六閣・天童山・阿育王山

塚本 磨 充

一. はじめに—「太白名山碑」概要

「宋孝宗御書太白名山四大字」(東福寺蔵、図1、以下「太白名山碑」)は、聖一国師円爾弁円(一一〇二〜一二八〇)が入宋のおり嘉禎元年(一一三五、南宋端平二年)四月〜仁治二年(一二四一、南宋淳祐元年)六月請来したとされる碑拓である。この碑拓については、東福寺普門院の蔵書目録に、多くの宋版書籍と並んで「径山書



図1 「宋孝宗御書太白名山四大字」(東福寺)

額等、歴代法帖」が著録されていることから、文和二年(一一三三)までには他の宋拓碑本同様に東福寺にあったことがわかる。¹⁾「太白名山碑」は、全体を筆でこするようにしてとられた氈蠟の拓本で、日本に伝わる宋拓本の技術的基準作として知られ、また、雄渾な筆法でかかれた「太白名山」の四字は、南宋の大字書法のありかたを伝える重要資料として、これまでも書法史上は重要視されてきた。

縦一八七・九cm、横八四・二cmにもなるこの巨大な碑の拓本は、碑額に「御書」の二文字と雲龍瑞華紋、中央四文字のなかに「御書之寶」印、その上に「賜天童山」の文字が記される。「太白山」とは、本碑が下賜された浙江省天童山のことである。この御書碑下賜の由来については、下に付された了朴自身の文や樓鑰「天童山千佛閣記」などによって知ることができる。²⁾これによると、魏王愷(一一四六〜一一八〇)は天童山景德寺僧慈航了朴を氣に入り「暇日来游」して累日去るに忍びなかったため、父孝宗へ「太白山図」を以て進上し、少保右丞相永国公史浩(一一〇六〜一一九四)の奏

請を経て、淳熙五年（一一七八）宸翰大書「太白名山」が下賜されたという（年表44）。了朴は宸翰を賜ると寺門の上に「雲章閣」を建てこれを刻して掲げ、真蹟は方丈に別に一閣をなして保存した。現存する東福寺の「太白名山碑」は石碑からの拓本であるため、御書は真蹟の他に刻石され、そこから拓本がとられたものが本作であろう。

すでに北宋の入宋僧成尋（一〇一一〜一〇八一）は、滞在していた開封太平興国寺伝法院において太宗皇帝、真宗皇帝の御書碑を見し、それが三階大閣の中にそびえる高二丈の碑であることを記録している（年表26）。これと較べると「太白名山碑」は約三分の一の大きさであるが、それでも宋皇帝御書碑の巨大さとその気宇の大きさを伝えていと言えよう。では、このような御書の下賜と拓本化は、宋代においてどのような歴史的背景と意義をもって行われたのであろうか。従来の様式変遷中心の書法史や絵画史研究では、少数の解説をのぞいて、「太白名山碑」が南宋社会において果たしていた役割についてはほとんど議論されてこなかった。そこで本稿では前半において、皇帝の御書の社会的機能について年表を中心に詳しく考察し、後半に「太白名山碑」自体の問題を考察していきたい。本作品が宋代社会において固有の意味と役割をもち、また日本に請来されたことによって本来の南宋宮廷の意味を離れ、禅林墨跡としての新しい意味を獲得していく過程を考察することが本稿の目的である。それではまず「太白名山碑」の書風を検討することから始めたい。

二. 宋代皇帝御書の変遷と孝宗書風

「太白名山碑」は南宋二代皇帝孝宗（一一二七〜一一九四、在位一一六二〜一一八九）の御書である。両宋三百年間に見られる顕著な特徴の一つに、皇帝が皆な書をよくすることが挙げられる。孝宗もそうした皇帝の一人であるが、宋代に書法をよくする皇帝が多く生まれた理由には、士大夫の文化が皇室に及んで皇帝自らが文人化し、文化的自己表象の手段としての書法が重要視されたことが挙げられる。それは士大夫文化の成熟とともに、皇帝の書風が変化していくことから窺えよう。

宋初の御書の特徴付けるのは飛白書である。三皇帝（太宗、真宗、仁宗）はみな飛白をよくし、それは唐代から続く皇帝を表象する機能を継承するものであった事はすでに指摘した。日本では空海によって飛白書（図2）は嵯峨天皇に伝えられるが、この背景には大陸で、飛白が皇帝の書としての意味を持つていたことと関係がある。その後日本で飛白書は変容を遂げつつ、その本来もっていた隷書の



図2 空海「真言七祖像贊」（善無畏像、部分）（東寺）



図3 徽宗「瑞鶴図卷」並御書（遼寧省博物館）

筆法を失い、次第に装飾的になりながら、宮中の扁額を飾っていくことはよく知られている。ところがこれらの扁額が日本で成立する十〜十一世紀ごろ、同時代の北宋の宮廷も、唐の皇帝を模倣する、北宋皇帝自身による飛白書で飾られていたのであった。この時代は、まさに飛白の時代とも言えよう。

このような宋初における飛白は、その工具の継承にも見られる。太宗（九三〇〜九九七、在位九七六〜九九七）が御書をなす筆は当時から特殊なものであったようで、大中祥符二年（一〇〇九）にはその鏤文紅管筆が下賜され（年表7）、同五年（一〇一二）にも近臣がその筆を見ることを願っている（史料8）。確かに飛白書を為すには木ヘラのような特殊な工具が必要であり、このことは、真宗（九六八〜一〇二二、在位九九七〜一〇二二）崩御間もない乾興元年（一〇二二）三月、仁宗（一〇一〇〜一〇六三、在位一〇二三〜一〇六三）が真宗靈御前に並べられた、おそらくは真宗遺愛の品であらう木皮「飛白筆」を執ると忽ちのうちに飛白書をなして分賜し、そのことが仁宗一代の飛白書下賜の開頭となったという逸話からも窺える（年表11）。

このような皇帝飛白の製作は仁宗朝にピークを迎え、宋代皇帝を象徴するものとして遼興宗にも贈られている。次代の神宗（一〇四八〜一〇八五、在位一〇六七〜一〇八五）、哲宗（一〇七六〜一一〇〇、在位一〇八五〜一一〇〇）にも飛白の製作は確認できるがその制作は次第に低調になり、次代の徽宗（一一〇八二〜一一三五、在位一一〇〇〜一一二五）朝に至って御書は瘦金体へと変化する（図3）。飛白体は荘嚴であるけれども硬く装飾性に流れがちである

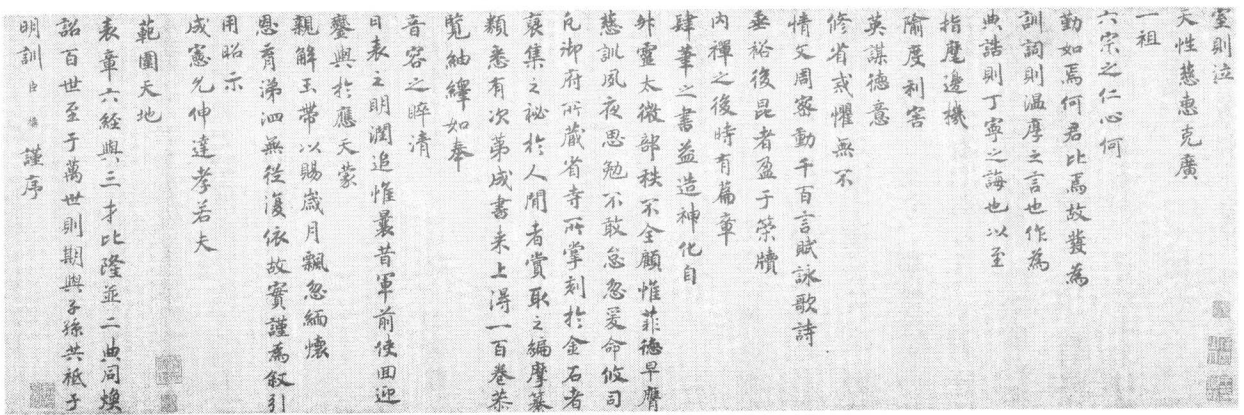


図4 高宗「徽宗文集序」(個人)

のに対して、瘦金体はより芸術性が高く、かつ士大夫書風のように感情を完全に露出することもない。まさに新しい皇帝をあらわすのにふさわしい書風であったと言えよう。⁵⁾

南宋に至ると皇帝御書は再び変化する。南宋初代皇帝高宗趙構(一一〇七～一一八七、在位一一二七～一一六二)は徽宗の九男として生まれ、本来は帝位に就く予定はなかった。そのためか、若年は徽宗のそれと同じく、文人文化に触れて書は黄庭堅を学び、自由な文人尚意書風を吸収していた。しかし靖康の変の後ち擁立されて急遽即位すると、皇帝にふさわしく、かつ「御筆相亂」をふせぐためという理由⁶⁾で黄庭堅風を廃し、六朝の鍾繇に学ぶ典雅で擬古的な書体を確立した(図4)。これらはいずれも見た目が復古的で美しく、代筆しやすいうえ、一見して特定の個人の書風であることが分かり、また線のかすれ等による微妙な感情表現を伴わない。士大夫たちの審美要求に適合しながらも皇帝御書にふさわしい特徴を備えた書体と言えよう。この御書体は南宋の新しい規範となり、以後皇室に受け継がれていくこととなるのである。⁷⁾

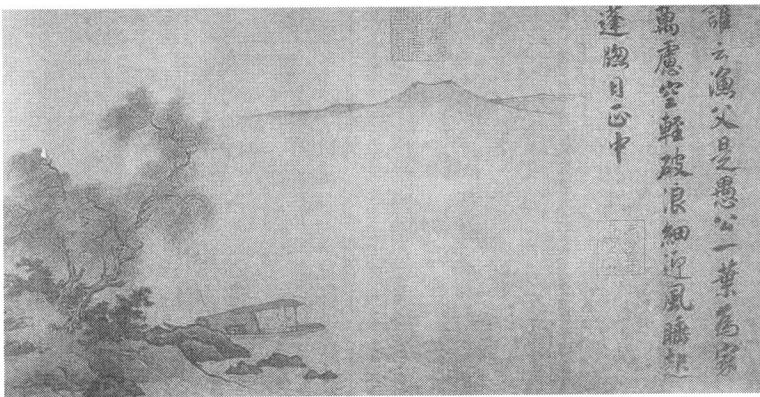


図5 孝宗「蓬窗睡起册」(台北・故宮博物院)

高宗には子がなかったため、太祖七世の孫にあたる趙昚が選ばれて禁中で育てられた。第二代孝宗である。その現存する作品は少ないが、研究史上は、高宗と孝宗書風の差異が議論され、高宗書風をやや豊かに丸みをおびたものが、孝宗の書風と考えられている。その書風は、「孝宗書は家庭の法度あり」と言われ、幼年から過ごした宮中において伝えられた高宗御書の書風を継承したものと見えよう(図5)。

このような宋代御書の伝統の上に孝宗書風は誕生したわけであるが、「太白名山碑」は大字であり、これらの書風とはまた異なった特徴をもつ。ではその書風はどのように解すべきであろうか。中国本土にはその他にも孝宗御書碑原石が現存している。今比較を行うことでそれらに共通する特徴を確認したい。

「韓世忠神道碑」(現碑江蘇省呉県、図6)は淳熙三年(一一七六)に南宋の名将であった韓世忠(一〇八九―一一五一)墓所神道に賜った孝宗御書碑である(年表41)。功臣に神道碑を賜うことは秦檜(二〇九〇―一一五五)の例(年表38)を初めとして多く見受けられることであるが、死後二十年近く後になって御書神道碑を賜った理由は、韓世忠が抗金主戦派であり、秦檜没後の孝宗朝に至ってようやくその名誉を回復された為であろう。この碑には御書題額十字の中央に孝宗御殿である「選徳殿書」の御璽が押されている。また「石湖碑」(現碑江蘇省呉県、図7)は、范成大(一一二六―一一九三)に下賜されたものであるが、その由来は御書の下につけられた范成大自身による由来記によって明らかで、それによると故地蘇州石湖に建てた別墅に、淳熙十五年(一一八八)に下賜され孝宗



図6 「韓世忠神道碑」(江蘇省呉県)



図7 「石湖碑」(江蘇省呉県)

御書二字を刊石したものであった(年表49)¹¹⁾。中央には「御書之寶」が押され、「太白名山碑」と同一印である。特徴のある左払いや横画の角度などからは「太白名山碑」と同じ工具と筆写者¹²⁾を予想させよう。またその立石のスタイルも共通し、このことから「太白名山碑」が確かに当時大量に下賜された孝宗御書碑の典型的スタイルを伝えるものであることが確認できる。范成大はこのような新しい皇帝の書体について、古代の書法とされた「神禹碑」(または「峒嶼碑」「禹碑」現存浙江紹興市會稽山)との類似を述べており、起筆、終筆などの明確な筆法を使わず、筆の勢いで雄渾に描き出すような本作のような書風が、当時の人にとって斬新な書体であったことが理解される。この書体はそれまでの飛白や顔真卿書による大字と大いに区別され、南宋の新しいスタイルとして、後の張即之や無準師範の書風に受け継がれていくものと考えることが出来る。

以上のことから宋代皇帝の御書が時代とともに変遷し、孝宗御書がその流れの中で生み出されたものであったこと、また「太白名山碑」が南宋社会にあつては、皇帝御書の生産という文脈で捉えられべきで、他の遺例とも共通する形式を持っていることを確認した。ではこれらの御書は社会の中でどのような機能をもって流通し、立石拓本化されたのであろうか。

三、御書と宋代の社会

宋代の史書をひもとくと、皇帝の書を賜う、またはそれを展覧し群臣に示す活動が多く行われていることに気がつく。宋代御書は社会で流通し、それは三館秘閣六閣とよばれる宮廷文物収蔵公開機関と密接に結びついていた。今ここでは稿末に付した年表をもとに、皇帝御書を(一)親筆の墨蹟、(二)額榜、(三)拓本、に分けて論をすすめることとする。

(一) まず挙げなければならぬのが皇帝の親筆である¹³⁾。皇帝の御書は佳節や、功臣が罷職して帰郷する時、新進士の及第や先帝を顕彰する大々的な文化事業が行われる際などに、近臣や学士に下賜された。その内容は古詩や臣下を讃える文句、また実用的なものとして新纂なった書物の序などがある。太宗は近臣にむけて故事をひきながら勸戒の意を示す御書を賜うことが多く、真宗朝の観書会において「太宗故事御書は皆な監戒」であったという感想が残っている¹⁴⁾。また高宗は「車攻詩」「趙充国伝」といった夷狄との戦いの故事を多く下賜し、国土回復の意思を臣下に示したことも挙げられるように(年表31、33、34)¹⁵⁾、御書の下賜はその時々政治的課題と皇帝の意思を宣示する手段でもあった。

一方御書を受けた臣下は、閣を建てそれを奉安する例が多くみられる。劉筠(九七〇〜一〇三〇)が廬州に真宗御書を奉安する殿を建てたこと(年表13)や仁宗御書閣を第中に建てた張士遜(九六四〜一〇四九)(年表14)、また仁宗御書を得た文彦博(一〇〇六〜

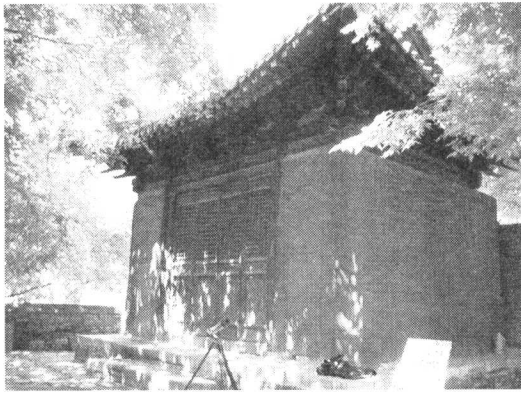


図8 山東省靈岩寺御書閣（重建）

一〇九七）は閣を建てそれを奉安した（年表28）こと等が挙げられる。これらはすべて北宋の皇帝権とそれに連なる自身の正当性を、御書閣の建設で象徴的に顕示するものと言え、現在でも各地に御書閣が現存している（図8）¹⁶。また特に徽宗朝以降には私第に御書閣を建てるのが流行した（年表29）。このような象徴的な御書閣の建設は国外においても行われ、例えば嘉祐七年（一〇六二）西夏毅宗（一〇四七〜一〇六七、在位一〇四八〜一〇六七）は、仁宗に上表して太宗の御製詩草、隸書石本を求め、書閣を建てて宝蔵せんとしたという（年表22）。当時西夏は遼との複雑な関係上も、北宋とより友好的な関係を結ぶことを欲していた。毅宗は太宗御書閣の建設によって、具体的な親宋政策を国内外に宣示する目的があったと言えるだろう。¹⁷

一方、皇帝崩御後その御書は収集の対象になった。この役割を担ったのは歴代各皇帝の御書御集、遺愛の品等を収めるために作られた御書閣である。北宋末までに理念上、太宗（龍図閣）、真宗（天章閣）、仁宗（宝文閣）、神宗（顕謨閣）、哲宗（徽猷閣）、徽宗（敷文閣）と次々と建設された御書閣は、開封宮城の西辺の一面を占め、学士もおかれて、秘閣と並んで宋代における文物公開の主

要な舞台として機能していった。南宋になると紹興十年（一一四〇）臨安に天章閣が建てられ、そこに北宋以来の諸閣は包括されていくこととなる。南宋岳珂（一一八二〜一二三四）『寶真齋法書贊』巻一「歴代帝王帖」¹⁸には宋太祖から寧宗に至る歴代皇帝御書が詳細に著録されるが、そこに記された御書の内容をみると、「太宗皇帝古詩御書」「徽宗皇帝秋賦御書」などの詩をはじめ、「仁宗皇帝浄字御漢體書」「神宗皇帝龍字御漢體書」などの臣下に賜う書、また「太宗皇帝南牙謝熊白状」「徽宗皇帝傳旨御批」「高宗皇帝馬政兵事手札御書」などの御批を施した政治文書¹⁹に至るまで多岐にわたる御書が収集鑑賞されていることを知ることができる。まさに太宗崩御後の咸平五年（一〇〇二）、真宗によって「太宗の題記、時事片幅、半紙屏扇の書などすべて表具して保存せよ」と言われ、²⁰諸州に太宗御書の献上が詔されたように（年表6）、皇帝の親筆は崩御後すべてが御書閣を中心に、収蔵と鑑賞の対象とされたのである。

御書の収集と展示は次代皇帝の正当性を群臣に示す重大な文化事業であったから、献上した者には職官や銀絹が与えられていった（年表参照）。例えば康定二年（一〇四一）真宗御書三十三軸を献じた趙永徳に対して恩州刺史が与えられた（年表15）。御書は家に寶蔵されて伝えられ、その子孫から多く献上されていく（年表35）。しかし真宗御書について言えば、皇帝崩御後約三十年を経た至和年間頃にはすでに収集の飽和状態を迎えたようで、御書献上がはなはだ多い事が言われ、²¹またこのような御書収集による価値上昇は、民間において御書の売買の風潮までをも生んでいたらしい（年表

21)。ここでは、一旦民間に下賜された御書が皇帝崩御後その付加価値を増大させながら、再び大量に宮廷に回流していく様子が想像できる。

靖康の変を経た南宋では、前述『寶真齋法書贊』に「天章閣」の印のある「真宗皇帝御製朱表御書」が著録されるように、宮廷旧蔵の御書は多く民間に流失し、それに呼応するように、復興期の文化事業として太宗、真宗、仁宗、徽宗、欽宗など北宋皇帝御書が精力的に収集されていく(年表46、及び*参照)。まさに南宋宮廷において最も熱心に集められた文物の一つは、図画、古器とともに、北宋皇帝の御書であったと言ってもよいだろう。かくも精力的に御書が収集された理由は、それが宮廷文物展観の場である観書、曝書会において、不可欠の展示物であったためである⁽²²⁾。

観書会とは北宋初期からおこなわれ、三館秘閣六閣を中心に収集された文物を皇帝が群臣とともに観じ、宋朝の文化的権威を確認する活動のことである。中期以降には、より祝祭的な曝書会も行われるようになり、全体で六十余回の記録を見ることが出来る。曝書会は南宋でも引き続き行われ、それは次第に国家の威信をかけた大規模な活動となっていた。

例えば紹興十四年(一一四四)、新秘書省の落成とともに行われた曝書会では(年表36、37)高宗の来臨を仰ぎ、群臣が参加して歴代御書、御製、晋唐書画、三代古器を陳し、あわせて御書扇、筆墨などが下賜されたことが知られる⁽²³⁾。この時高宗は「秘府の書籍尚お少なし、宜しく広く求め訪ぬべし」と言い、この言葉に呼応するように、その後も南宋復興秘閣の収集活動は続けられた。紹興二十

九年(一一五九)閏六月には、通常歳費の三倍以上の一千貫を支出する大規模な曝書会が開催され(年表39)、おそらくこの十五年間に新収されたであろう古器や図画、名賢墨跡に加え、祖宗御書が展示されている⁽²⁴⁾。

またその観者についてみると、紹興十四年秘書省曝書会では、かつて紹興十二年(一一四二)の岳飛の追放で安定をみた秦檜体制の成立を祝するのように、百官を率いて高宗を奉迎したのは尚書左僕射監修国史たる秦檜であり、また淳熙五年(一一七八)孝宗が秘書省に幸すと、紹興十四年のごとくに曝書がおこなわれ、秘閣の東西壁に歴代御書、高宗(光堯太上皇帝)の琴賦を以って群臣に示し、さらに翌日御製詩を賜ったのは宰臣史浩(一一〇六―一一九四)であった⁽²⁵⁾(年表43)。このように南宋曝書会における重要な文物の観者は、皇帝であるとともに、それに列する宰相以下の士大夫たちの集団であり、彼らが文物の展観と、それに伴う御書、詩文の応酬によって、その官僚秩序を確認する場こそが曝書であったと言える。このような文物展観の場において不可欠の展示物であり、その目的に最も適う展示物の一つが、収集された歴代皇帝の書法であったのである。

(二) 皇帝の御書は詩や文章だけでなく、額や題榜も、下賜されると同時に鑑賞される対象となった。開封宮廷における文教を司る二大機関であった翰林学士院⁽²⁶⁾と崇文院秘閣にはそれぞれ太宗飛白「玉堂之署」、「秘閣」額並びに序賛が下賜されている(年表1、2)。また国家祭祀を行う重要な殿閣、明堂には仁宗御書額が下賜された(年表19)。これ以外にも、大中祥符七年(一一〇一四)降臨した天書

